
追悼 国広哲弥先生
Obituary TETSUYA KUNIHIRO

国広哲弥先生を偲んで

柴谷方良

本学会第10代会長であられた国広哲弥先生がお亡くなりになったという知らせを浅からぬ感慨を持って受けとめた。国広先生とは師弟・同僚といった関係ではなかったが、そのお人柄に触れる機会に恵まれ、また年齢の開きから、その後どうしていらっしゃるかという想いが時として胸をよぎることがあったからである。

私が国広先生と間近に接することが出来るようになったのは、先生が会長になられた1985年以降のことである。井上和子第9代会長の後を継がれたのであるが、リベラルで高德な井上先生のお陰により、堅苦しかった日本言語学会の雰囲気ガラリと変わった状況下での会長就任で、磊落な性格であられた国広先生にとっては幸いであったと想像できる。

もし私の記憶が正しければ、国広先生の会長在任中のお仕事の一つとして、日本学術振興会からの要請によると思われる、言語学用語の整理というものがあった。要するに、主に英語の用語を選別して、それぞれの対訳の標準化に資する言語学用語集の取りまとめである。国広先生の委嘱により常任委員を務めていた私は、アメリカでの研究生活が長かったということもあってか、この用語委員会のお手伝いをする事になり、国広先生のお膝元近くで学会の運営を観察できる幸運に恵まれ、この時の経験が後年私が学会をお預かりした時に、ずいぶん役にたった。日本英語学会との共同事業であった用語集の仕事は、その後小泉保第11代会長に引き継がれ、奇しくも私が会長をしていた1998年になって、やっと『学術用語集 言語学編』として日本学術振興会より出版された。

以上のような学会関係の仕事を通して国広先生から薫陶を賜ることになった原因の一つに、先生による拙著『日本語の分析—生成文法の方法—』に対する好意的なお受け止めがあったかと思われる。意味論を専攻なさっていた先生にとって、主に統語構造を対象にした生成文法は取るに足りないものと映っていたかも知れないところに、文の構造と意味の対応をかなり広く取り上げた小著を目にされ、そういう生成文法もあるのだ、と認識を新たにされた可能性がある。

そのようなこともあって、国広先生には当時私が奉職していた神戸大学文学部に1, 2度集中講義にお出まじただくことになる。ご宿泊先での会食における懇談以外に、先生のご講義も何度か拝聴する機会を得た。先生のお話しは、淡々とした

口調で、力を入れ過ぎて疲れてしまう私の講義などとは違った、物静かなものだったという印象が残っている。何でもお若い時に胸をお患いになったとかで、その影響があったのかも知れない。また、先生は学生からの質問などに対しては、根気よく丁寧にお答えになっていらっしゃったし、またご自身がお答えに出来ない問題については、躊躇なく正直にそうおっしゃっていたように覚えている。特に印象的だったのは、ご自身に向けられた批判などに対しては、アッハハと大きな口を開けて、全く意に介さず、学問とはそういうものだということをご大らかな態度で示されていた点である。

国広先生のこのような開放的なお心構えは、大学の運営や人事についても発揮されていたようで、東大出以外の人材登用は行わないとされていた当時の東大にあって、学外出身者の任用に向けての運動を行っていらっしゃったと伝え聞いている。その時の働きかけは内部事情で思う結果に結び付かなかったようであるが、昨今の東大人事では常態化している学外出身者採用の機運を高められたことは間違いないと思われる。

このように、国広哲弥先生は意味論分野の先達としての言語学・英語学への学問的な貢献ばかりでなく、学会活動それに学内外の諸事業に対して大きな足跡と功績を残された。92歳という天寿を全うされた先生のご人徳を敬慕しつつ追悼の意を捧げます。

(日本言語学会元会長／神戸大学名誉教授／ライス大学名誉教授)

国広哲弥先生の思い出

山田 進

国広哲弥先生にはじめてお目にかかったのは1969年の12月だったように思います。私が東京大学に入学したのは1967年4月で、国広先生が東大に赴任されたのは、年譜（『文法と意味の間—国広哲弥教授還暦退官記念論文集—』1990、くろしお出版）によると、「1968（昭和43）年12月 東京大学文学部言語学科に配置換え。東大紛争の真っただ中であつた」とのことです。通常ならば、私の学年が駒場から本郷の文学部に進学するのは1969年4月になりますが、1968年初頭の医学部に端を発した学生運動が全学に広がり、「大学紛争（大学闘争）」の状況が続いていました。1969年1月の安田講堂事件、3月東大入試の中止を経て紛争が一段落して進学できたのが1969年の年末だったわけです。いまあらためて思うと、私は国広先生が東大で最初に講義をなさった学生のうちの一人だったことになりました。この追悼文を執筆するにあたり、そのころのことを思い出そうとしてみたのですが、当時の記憶がおどろくほどうすれていることに愕然としました。言語学科の知りあいなた

ずねてみたりしましたが、たがいに記憶が一致しないことも多く、まるで記憶の相補分布状態になっていることにあらためておどろきました。なお、先生のお名前は一時、「國廣哲彌」と表記されることがありましたが、以下ではすべて「国広哲弥」という表記にいたします。

私が進学したときの言語学科は、1967年に高津春繁先生、1968年に服部四郎先生が退官なされ、柴田武、三根谷徹、国広哲弥の3先生が専任でいらっしゃいました。最初に受けた国広先生の授業がテキストを使ったものだったかどうかははっきりしません。『構造的意味論』は1967年12月に発行されていますからそれだったのかもしれませんが。その後、『意味の諸相』や、さまざまな意味論の論文を読む授業がありましたが、なにしろあまりよく思い出せないのですから困ったものです。当時の日本の言語学は生成文法がもっとも注目されている状況でした。私も生成文法について最低限の知識を得ようとはしましたが、そのころの私は国広先生が担当なさっていた意味論の授業に大きな魅力を感じ、意味というものをより深く勉強してみたいと思うようになりました。

これはいま思えば僥倖としかいいようがないのですが、柴田先生が主導し、国広先生、学科の先輩でフランスから帰国して間もない若手大学教員の長嶋善郎さんの3名に、修士課程大学院生の分際の私が参加を許されて、1972年に「意味論研究会」が発足しました。この会は『月刊百科』という出版社広報誌に連載するための原稿を用意するためにはじまったもので、私の意味論研究のもっとも大きなよりどころとなりました。意味の違いが問題になりそうな類義語を各自が持ちよって全員で討論し、その結果を担当者がまとめて文章化し、その文章をさらに全員が検討するという過程を繰り返し、広報誌に掲載する原稿を作りました（その成果は、柴田武・国広哲弥・長嶋善郎・山田進『ことばの意味—辞書に書いてないこと』(平凡社、1976)として出版されることとなります)。この研究会はその後、新たなメンバーを1名加えて月1回ないし2回の頻度で9年余り続けました（上記に続いて、第2巻(柴田編、1979)、第3巻(国広編、1982)が出されています。第2、3巻には共著者として浅野百合子氏が加わりました）。意味論研究会での議論がどれほど私の血となり肉となったかは計りしれません。400字詰め原稿用紙10枚にまとめたものが徹底的に批判されるという経験を通じて、文章の書き方も鍛えられました。

私が名古屋に職を得て東京を離れたあとも、またその後東京にもどってからも、国広先生に著書・論文を送っていただいたり、私からも論文をお送りしたりしてきました。先生に送っていただく論文に私なりの意見を申しあげると、批判をいただくこともありましたが、それ以上に温かく見守ってくださることのほうが多かったように記憶しています。

国広先生は服部四郎先生の「意義素」を継承し発展させてこられたわけですが、その一方でつねに「新しいこと」を開拓なさってこられました。とりわけ、認知をキーワードにした研究を発展させ、「現象素」の提唱など先生独自の認知意味論を開拓なさいました。そのほかにも、「再帰中間態」などの新しい見解が思い起こされます。

それにひきかえ私は最初に学んだことを後生大事にしてきた人間です。私も「認知」というキーワードを使った説明をすることはありましたが、それを前面にたてて記述をするという方向にはむかいませんでした。国広先生はおそらく、そういう私のことを「新しいことをほしがらない古いやつ」だなあとお思いになって苦笑されていたのではないかなどと勝手に想像しています。

国広先生のお人柄については、上記還暦記念論文集の「編集後記」に、あるエピソードが記されています。

先生はお酒も嗜まれないし、ただただ謹厳実直なばかりで、逸話にははなはだ乏しいのである。その中であって、久保田氏の一文【山田注：久保田美昭「言語学者との一時間（3）国広哲弥氏」『月刊言語』11-3（1982.3）】は貴重な情報を数多く含んでいる。たとえば、先生は歌うのがお好きだなどということも、私どものついで知らないことだった。ところが先日の還暦記念パーティーでは「蛍の光」を皆と一緒にハーモニーで歌うのが長年の夢だったと言われる。急きよ言語学科有志によって合唱団が形成され、練習を重ねること数度、ついにその夢は実現した。席上には宇部高校の卒業生が数人おられたのでこのついでに伺ったところ、国広先生のお声は若いころとちっとも変わってらっしゃらないという。なんとなく不思議な気がする。

国広先生の歌は一部の人にしか知られていないようです。1982年前後のことなのですが、先生がコンパの席で五輪真弓の「恋人よ」を歌われたことがあるそうで、そのときは「海ゆかば」もあったりして、とてもおどろいたなどという話を伝え聞きました。1996年10月の言語学会大会は北海道大学でおこなわれ、懇親会のあと非常にめずらしいことなのですが国広先生と二次会に繰り出しました。私のほかに男女1名ずつとご一緒でした。その店はスナック風の店でカラオケがあり、国広先生が「恋人よ」を音吐朗々と歌われたんです！「海ゆかば」も聞いた気がします。

国広先生が傘寿をお迎えになったそのすこしあとくらいから、先生がアメリカにいらしたときに交流がはじまった方で私がある研究会で知りあいになった方と一緒に国広先生をお誘いし3人で食事会を年に一度、葉山、横浜、江の島などでおこなうようになりました。三人でほんとうに楽しいひとときを過ごすことができました。5,6年はつづいたでしょうか。このところしばらくお会いできずにいてどうしていらっしゃるかとお気がかりでした。もう一度お目にかかれればと思っていたところに突然の訃報に接しまことに無念の思いです。

話が前後しますが、「恋人よ」に関して不思議なことがありました。今年の4月に上記の方とご遺族のもとをたずねた帰りに最寄りの駅ちかくの酒場に入ったのですが、席につくなり「恋人よ」が聞こえてきたんです。歌い手は五輪真弓ではなくポップス調の女性シンガーでしたが、それにしてもこれはどういうことなんだろうと二人で顔を見あわせたものでした。

国広先生、私もいずれそちらにまいります。そのときは先生と一緒に歌を口ずさめればと思っています。それまでどうぞごゆっくりおやすみください。

(聖心女子大学名誉教授)

国広哲弥先生 ありがとうございます

菊地康人

「旧制山口高校に入学したとき、一般の研究者とは異なって、日本語と英語に同じ比重をおいて勉強していくという大方針を決めたのです。」国広哲弥先生はこう述べていらっしゃる(『日本語学を斬る』(研究社, 2015)の「はしがき」)。日本語・英語の本物の両刀使いの研究者は、今もそう多くないが、まして当時はごく珍しかったに違いない。

しかも、先生のご関心は日英両言語について、音韻・文法・意味に広くわたり、語用論・社会言語学にも及んだ。認知言語学を一部先取りしていたともいえるお仕事もある。時には日英語の一方だけを対象に、国語学(日本語学)界でも英語学界でもそれぞれ認められるお仕事をなさり、また、両言語を対照言語学的に魅力的な見方で捉えられ、いうまでもなく言語学者として高い評価を得てこられた。若くから高い志を持たれ、それを見事に実現された研究者であった。

東大言語学科は、日英独仏中のような比較的身近な言語ではない言語(「特殊言語」と呼ばれる)の研究が推奨される伝統がある(あった)。例えば服部四郎先生は本来のご専門がモンゴル語、柴田武先生はトルコ語である。もちろん母語である日本語への関心を持つことの重要性を服部先生は説かれてもいたが、専任・非常勤の先生も学生も専門は「特殊言語」というケースが多い中、国広先生のように「日本語と英語」を専門とするケースは、これも当時の言語学の世界では(少なくとも東大言語学科では)珍しかったはずである。

国広先生は、その珍しい学生として学生生活を送られ、言語学科だけでなく、英語学・国語学・中国語学の錚々たる先生方の授業も貪欲に受けられたことが、前掲書の「あとがきに代えて」に見える。30歳代で東大言語学科に着任された。東大言語の先生としては、やはり「日本語と英語が専門とは珍しい」というケースだったことと思うが、国広先生が在職なさっていたおかげで、「特殊言語と一生つきあう勇氣はないが、ことばが好きで、日本語や英語を題材に研究ができるなら」という学生たちが言語学科に進む勇氣を得て、言語学科の生活を愉しむことができた。私もその一人である。

院生が一人ずつ、日本語の任意の類義語のペアを選び、その違いを分析する案を示し、先生と他の院生がそれに批判や修正案を述べて討議を重ね、最終的に両語に

ついてポイントを抑えた意味記述に到達することをめざす演習『意味分析』は、40年も前としては大変新鮮であった。演習といえば洋書輪読が多かった中で、よくぞこんなに魅力的な演習を企画してくださった、という思いであった。

先生の広範な学問的業績をしっかり紹介できる力はいにく私にはないので、多少個人的な思い出を交えさせていただくと、先生との最初のご縁は、先生の意味論の授業を2年生のときに拝聴したことであった。東大には、志のある先生が、オブリゲーションでない授業を、教養課程の学生向けに出講する「全学ゼミ」という制度があり、それによる駒場へのご出講だった。あとでわかったことだが、毎年なさっているわけではなく、たまたま受講できたことはかなりラッキーなことだったようである。のちの『意味論の方法』(大修館書店、1982)の原型のような内容であったが、1970年代半ばに「意味論」と銘打った授業はまだ珍しかったと思う。受講自体も幸いであったが、言語学か国語学かで迷っていた私は、本郷まで先生にご相談に伺った結果、迷わず言語学に進んだ。先生の駒場ご出講に伴ってご相談の機会を得、お励ましを得ることがなかったら、言語学に進む勇気は出なかったと今も思う。その後、大学院では指導教官になっていただき、やがて助手として国広主任教授にお仕えする機会も得た。これだけでもかなり深いご縁であるが、さらなるご縁もできた。

1985年、国広先生が言語学会会長になられ、上野善道先生と私とその補佐役を仰せつかったのである。初めの1年半は上野先生が事務局長で私はその補佐だったが、残りの期間は上野先生の海外出張のため、私が事務局長を引き継ぐことになった。当時は常任委員会+事務局長が現在の大会委員会の役割も果たしていたので、大会企画やプログラムの策定、講演者・発表者とのやりとりも事務局長の仕事で、30歳を少し過ぎたばかりの私は怖いもの知らずで事にあたったわけである。

85年の会長ご就任時のことは、言語学会の歴史の一面を伝えることでもあるので、少し立ち入って触れておくと、こんな大変なスタートはまずなかり、というものであった。前年度まで『言語研究』の刊行をお世話になり、学会の事務局も置かせていただき種々サポートを受けていた大修館書店さんからの、今後はそれは叶わなくなったという話が、降って湧いたように、会長を受けられたばかりの国広先生に届いたのである。大激震である。前会長井上和子先生のご努力もあり、何とかかなりそうな方向は少し見えてきていたが、それを早急に詰めて、まずは学会を続けて行けるようにしなければならない。国広執行部はこんな逆境からのスタートであった。

大修館書店さんのように何から何までお世話になれる先は望めない。『言語研究』の刊行と事務局の対外的な住所を置かせていただくことは三省堂さんに引き受けていただき、バックナンバーの扱いは三省堂書店さん(出版社の三省堂さんとは別会社だとこの時知った)にお願いし、会費の収受等はその方面の業者を探して委ね、これらの管理とその他一切を執行部(つまり上野先生と私)が担当する、ということになり、各方面と交渉を進め、その一方で学会の委員会(今の評議員会)の承認も得ていかなければならない。各方面との交渉も時にハードだったが、すんなり行

かない委員会も荷の重いことであった。

委員会で願わしいところにうまく収束させられるかと、事前準備の折や会議中に周囲はずいぶん気を揉んだものだが、国広会長ご自身はまことに泰然自若と進行され、無事落着の後で関係者が「よかったですね」と胸を撫でおろしている席でも、「いや、私は心配していませんでした」とあっさりおっしゃる。持って生まれた大器というべきか、羨ましく思ったことであった。委員会関係も、各方面との交渉も無事整っていき、結果として国広会長は、上述の激震の中を、言語学会の態勢を大きく変えて乗り切る舵取りというきわめて大事なお仕事をつとめあげられたのである。このことは、今の会員の皆さんにもぜひお伝えしておきたい。

先生の人との交わりは、まさに「淡きこと水の如し」であった。上述のようなご縁があり、ご自宅にも何度か寄せていただいた私にも「です・ます」でお話しになる。宴やパーティー以外でのお酒のお供もする機会はなかった。だが、時々とても貴重な一言が伺えたり、温かい目でごらんくださっていることがわかるうれしい一言に接したりでき、それらは今も心に強く残っている。

奥様とは、大層仲のよいご夫婦だというご様子がかがえた。その奥様が病に臥され、おつらいに違いない時にも、先生ご自身のご健康については、「元気です。死ぬ気がしない」という力強いお言葉を伺った。志を強く持たれ、晩年まで著述を遺されたのは、まことに先生らしい。真似ようと思っても、なかなかできることではない。

ついに行く道、と古人が言ったその道が、とうとう先生にも訪れてしまった。知力も体力も十分残していらっしゃったのに、偶発的に降ってきたお別れだったという。それを伺うとたまらなく切ないが、今は、先生とのご縁と、先生の遺された数々のお仕事と、お教えいただいたここには書き切れない多くのことに改めて感謝し、お別れの言葉とするほかない。

国広先生、当時の言語学科の学生たちに対しても、学会に対しても、さまざまなお導きとお心配り、誠にありがとうございます。お別れに際しまして改めて厚くお礼を申し上げます。

(国学院大学文学部教授／東京大学名誉教授)

略年譜

- 1929 (昭和4)年7月23日 山口県宇部市に生まれる
- 1947 (昭和22)年4月 (旧制)山口高等学校文科甲類入学
- 1950 (昭和25)年4月 (旧制)東京大学文学部言語学科入学
- 1954 (昭和29)年3月 東京大学文学部卒業
- 1954 (昭和29)年4月 山口県立萩高等学校教諭(英語)
- 1959 (昭和34)年10月 島根大学文理学部英語英文学科講師(英語学)
- 1964 (昭和39)年4月 島根大学文理学部助教授
- 1967 (昭和42)年8月 茨城大学教育学部英語英文学科助教授
- 1968 (昭和43)年12月 東京大学文学部言語学科助教授
- 1971 (昭和46)年4月から1985年3月まで
日本言語学会委員
- 1974 (昭和49)年9月から1975年1月まで
フルブライト上級研究員として Cornell University の
日本語学科に滞在
- 1975 (昭和50)年2月から8月まで
Trinity University 客員教授
- 1979 (昭和54)年1月 東京大学から文学博士の称号を受ける
- 1980 (昭和55)年8月 東京大学教授
- 1981 (昭和56)年10月 財団法人ラボ国際交流センター・東京言語研究所運
営委員
- 1983 (昭和58)年3月から5月まで
University of California, Berkeley 客員教授
- 1983 (昭和58)年6月から8月まで
文部省在外研究員として University of California,
Berkeley にて研究する
- 1984 (昭和59)年4月から1988年3月まで
東京大学言語学科主任
- 1985 (昭和60)年4月から1988年3月まで
日本言語学会会長
- 1988年4月から 日本言語学会顧問
- 1988 (昭和63)年5月 財団法人ラボ国際交流センター評議員
- 1989 (平成元)年8月から1990年1月まで
フルブライト上級研究員および東京大学海外学術研
究奨励資金により Cornell University 日本語科にて研
究する

1990（平成2）年3月	東京大学定年退官
1990（平成2）年	東京大学名誉教授
1990（平成2）年4月	神奈川大学外国語学部教授
1994（平成6）年3月	神奈川大学外国語学部定年退職
1995年（平成7年）から2005年（平成17年）	東京言語研究所所長
2000年（平成12年）	神奈川大学名誉教授
2022年（令和）2月6日	ご逝去

主要著作目録

【著書】

- 1967年 『構造的意味論—日英両語対照研究—』 ELEC 言語叢書 三省堂。（市河三喜賞受賞）
- 1970年 『意味の諸相』 ELEC 言語叢書 三省堂。
- 1975年 『シンポジウム日本語（3）日本語の意味・語彙』 学生社。〔共著〕
- 1976年 『ことばの意味—辞書に書いてないこと—』 平凡社選書。〔共著〕
- 1979年 『ことばの意味2—辞書に書いてないこと—』 平凡社選書。〔共著〕
- 1982年 『意味論の方法』 大修館書店。
- 1982年 『ことばの意味3—辞書に書いてないこと—』 平凡社選書。〔共著〕
- 1991年 『日本語誤用・慣用小辞典』 講談社現代新書。
- 1995年 『日本語誤用・慣用小辞典（続）』 講談社現代新書。
- 1997年 『理想の国語辞典』 大修館書店。
- 1997年 『小学館プログレッシブ英和中辞典 第3版』 小学館。〔編集主幹〕
- 2006年 『日本語の多義動詞—理想の国語辞典 II—』 大修館書店。
- 2010年 『新編：日本語誤用・慣用小辞典』 講談社現代文庫。
- 2015年 『日本語学を斬る』 研究社。

【翻訳書】

- 1973年 ジョン・ライオンズ著 『理論言語学』 大修館書店。〔共訳〕
- 1976年 G.N. リーチ著 『意味と英語動詞』 大修館書店。
- 1988年 スタインバーク著 『心理言語学—思考と言語教育』 研究社。〔共訳〕

【論文】

- 1962年 「国語長母音の音韻論的解釈」 『国語学』 50 国語学会。
- 1964年 「英語 number の意義素」 『言語研究』 45 日本言語学会。

- 1965年 「日英温度形容詞の意義素の構造と体系」『国語学』60 国語学会。
- 1967年 「‘And’ と『と・に・や・も』—日英両語語彙の比較—」『言語研究』50 日本言語学会。
- 1969年 「英和辞典の諸問題」『英語学』2 開拓社。
- 1969年 「言語と論理的思考」『国語教育』11(9) 三省堂。
- 1970年 「意義素から見た英語語彙論」『英語教育評論』4(2) オックスフォード大学出版。
- 1970年 “A Contrastive Study of Vocabulary—With Special Reference to English and Japanese—,” in *Studies in General and Oriental Linguistics. Presented to Shirô Hattori on the Occasion of His Sixtieth Birthday.* TEC Company, Ltd.
- 1970年 “Expressive culture and implicational culture.” Final Substantive Report of Joint Japanese-American Conference on Sociolinguistics. East-West
- 1973年 「言語の統一的モデル」『国語学』92 国語学会。
- 1976年 「日英語意味の比較」『講座新しい英語教育2 英語教育と英語学』大修館書店。
- 1977年 「日本人の言語行動と非言語行動」『岩波講座日本語2 言語生活』岩波書店。
- 1978年 「日英両語比較研究の現状」『現代の英語教育8 日英語の比較』研究社。
- 1979年 「意味の体系」, 「意味の変遷」『日本の言語学 第5巻 意味・語彙』大修館書店。[共編・解説]
- 1980年 『日英語比較講座 第2巻 文法』「総説」, 「補説」大修館書店。[編著]
- 1980年 『日英語比較講座 第1巻 音声と形態』「総説」, 「補説」大修館書店。[編著]
- 1980年 「意味の構造と概念の世界」『講座言語 第1巻 言語の構造』大修館書店。
- 1980年 “Personality-Structure and Communicative Behavior. A Comparison of Japanese and Americans,” Walburga von Raffler-Engel (ed.), *Aspects of Nonverbal Communication.* Swets and Zeitlinger, B.V., Lisse.
- 1981年 『日英語比較講座 第3巻 意味と語彙』「総説」, 「補説」大修館書店。[編著]
- 1982年 『日英語比較講座 第4巻 発想と表現』「総説」大修館書店。[編著]
- 1982年 「語義」『講座日本語の語彙1 語彙原論』明治書院。
- 1982年 「社会言語学の問題点と可能性」『現代思想』10(11) 青土社。
- 1982年 『日英語比較講座 第5巻 文化と社会』「総説」, 大修館書店。[編著]
- 1982年 「テンス・アスペクト—日本語・英語」『講座日本語 11 外国語との対照II』明治書院。
- 1983年 「ことばのゆれ」『東京大学公開講座 ことば』東京大学出版会。
- 1983年 「対照言語学」『大修館英語学辞典』大修館書店。
- 1985年 「言語と概念」『東京大学言語学論集 ’85』東京大学文学部。
- 1988年 「語の意味と句の意味・文の意味」『日本語百科大辞典』大修館書店。
- 1989年 「意味と用法」『講座日本語と日本語教育 第6巻 日本語の語彙・意味 (上)』明治書院。
- 1990年 「意義素論の展開」『東京大学言語学論集 ’89』東京大学文学部。

- 1991年 「意味の似た言葉」『言葉の意味』（「ことば」シリーズ34），文化庁.
- 1992年 「『のだ』から『のに』・『ので』へ—『の』の共通性—」『日本語研究と日本語教育』名古屋大学出版会.
- 1996年 「日本語の再帰中間態」『言語学林1995-1996』三省堂.
- 2002年 「助詞「が」の本質的機能—認知意味論の立場から—」『日本エドワード・サピア協会研究年報』第16号 日本エドワード・サピア協会.
- 2005年 「アスペクト認知と語義—日本語の様態副詞と結果副詞を中心として—」『副詞的表現をめぐって』ひつじ書房.
- 2006年 「ソーシャル構造主義は成立しない」『日本エドワード・サピア協会研究年報』第20号 日本エドワード・サピア協会.